

戦没者遺族会への聞き取り調査（記録）

平野 和世 さん

小林先生：平野さんよろしくお願ひします。

平野さん：ほとんどの戦争に関する直接の記憶ゆうのか、その私 3 歳ですね、あまりない。

小林先生：そうですね、記憶がないですね

平野さん：母からあの聞いたのがメインになります。ただまあ戦後に関して私の実体験のがあるんですけど。

小林先生：お父さんが出征されて、それはいつか分かりますか

平野さん：あの、とにかくいつってゆうか、まあおそらくね 3 歳になる前、半年ぐらい前やないかな思う。親父はあの国家総動員令がでました。それで駆り出されたんです。

兵隊検査ゆう検査があるんですけど、甲乙丙の丙です。まあゆうたら栄養失調みたいな体。まああとはっきりしてたみたいですけど。

それから、母によると戦争に駆り出され、まあ赤紙が来たからゆう話で、その、世の中とにかく召集されたらとにかくいかなあかんということで。で、まあ遺書みたいなものとか爪と髪の毛を切って、母に渡して、その行ったというふうなことを聞いてますし。

小林先生：最初に聞くの忘れてた。住まわれていたのはどこですか

平野先生：ああ、すみません大阪。大阪の大正区。泉尾っちゅうまして、あのへん鑄物工場とか鉄鋼上とかたくさんあるところでした、まあ部分的に神社仏閣が。ちょうどその神社のすぐそばに私の両親が借りてた家があつて、それは完全になくなってます。

小林先生：お仕事はなにを。

平野さん：田中鑄工所言ひましてね、鑄物工場のなんちゅうか現場監督をやつてたんです。

当時は鑄物の置物ですね飾る、それなんかをやつていたみたいです。

で、その作品なんかも見たことがありますけど、それが急きょ軍需工場化して、おそらく兵器のなんか作つてたと思うんですが。

ちょうどその社長にあたる人と私の父が遠い親戚になつてしまつてね。

で、親父のいわゆる出身地いいますのは、三重県の今の桑名市になるのかな。そこから大阪に働きに出てて。

小林先生：戦場に実際にかれたんですか。

平野さん：行ってます。

小林先生：そこに行かれたんですか。

平野さん：母から聞いたところによるとフィリピンのルソン島のバレット峠いうところで。ほんでその迫撃砲が肩か胸にあたって、ほぼ即死状態で亡くなりましたということを報告を受けています。

ただね、母が舞鶴へ遺骨がくるいうんでいったら、さっき井上さんのお話されたように、中身は何にもない。まあ砂か石かなんか、それしかなかったということで。

小林先生：いわゆる遺骨が帰ってきたのは戦後に帰ってきたんですね。おそらく。

平野さん：おそらくそうだと思います。戦後だと思います。実際死亡通知いうんか来たのは昭和 20 年 4 月 30 日。戦死という通知が来た。

ちょうどわたしその 3 歳と 2 か月くらいだったころですからね。そのあととはとにかく家は焼きだされ、一応その疎開してます。

小林先生：それはどこに。

平野さん：父の養父母の。で、父自身も幼いころに、そのお父さんを戦争で亡くしている、第一次世界大戦で。

小林先生：そうなんですか。

平野さん：そうなんです。その二人兄弟でして、お姉さんと 2 人兄弟になんすけども。それぞれ違うところに養女に養子に迎えられて育てられて、成人してそういう関係なんです。

だからもう戦争には散々、ええ、2代にわたって。だからもう憎む心は非常に強いです。まあそれはそういうことで置いとくんですけど。

あの私の母の親父、私のおじいさんですね。母方のおじいさん。

その方がまあ非常に要するに八人の子どもを、まあお役所さんのあれなんですけど、非常にまあ教育にね熱心な方でね、とにかく勉強だけはさせえゆうて大学まではいくらかかっても、当時 50 万くらいあれば、50 万かな、あのとにかく準備しとけど、だから子ども全部大学まで出せということで。母も聞いていてもう必死になって働きましたね。

で、母自身も大学教員からスタートして、はい。

で、その母の実家の岐阜なんですけど、桑名市に近いところで、海津市なんですけどね。ようするにそこに身を寄せて私らと一緒に、あの戦後ね。

小林先生：戦後。大学教員になられたのは、そしたら戦時中。

平野さん：私が小学校にあがるころですから。

小林先生：戦争終わってからですね

平野さん：もちろん終わってからです。私が小学校あがる、幼稚園、幼稚園の

年長くらいですからね、だから何年ごろかな。

小林先生：その時に大学教員であられた。岐阜の方で

平野さん：そうです。

小林先生：そこで生活されてた。

平野さん：そうですね。

小林先生：大阪で空襲で家が焼けた。

平野さん：焼けだされたから。はい。

小林先生：すぐにもう岐阜の方に行かれた

平野さん：さっきいった、それぞれ疎開をしまして。ようするに終戦直前で
すね。

親父が戦争に出征して、そのしばらくして、あのしばらくして、あのそれぞれ
私の父とその姉が同じところに住んでたんですけど、大阪に出てきて、両方と
も両親がいないもんだから、遠い親戚をたよって。

小林先生：ほんで空襲にあわれて。

平野さん：空襲に遭ったんですね。家財道具とかそういったものは私の家はた
またま疎開先へ、あの送っていたみたいです。

親父のお姉さんの方、同じように近所に住んでたんですけど、間に合わなくて、
てんでバラバラになったんですけども。

小林先生：ちょっと聞き洩らしましたがけれども、お姉さんと妹さんも一緒に岐
阜のほうに行かれた、それは一緒にいかれた

平野さん：もちろんそうです。しばらくその母の養父母のもとに、長屋みたい
なところ、ちょうど牛を飼ってましてね。

その、とにかく牛小屋の近くで、同じ棟の下なんですけど、母屋とは違うとこ
ろで庭があって。それであの、しばらく半年ぐらい住んだんですけども。

私そのころからはかろうじて覚えている。

とにかくもう夜中かゆくてかゆくて蚤がくるんですよ、牛小屋から。

もうほんで小学校あがる、あがるやないわ4歳ぐらいですね。4歳ぐらいの時
からちょっとほぼ記憶がある。

で、そのいわゆる疎開先から、私のおふくろの実家の家へ海津市なんですけど。

さっきも言いました疎開先ゆうのは上野河戸言いまして、養老山脈の。ちょう
どまあ、あの海老川ですよ。

小林先生：海老川。はい

平野さん：海老川、わたしが海津市の対岸みたいなどころなんですけど。

小林先生：そこにはいつごろまでおられた

平野さん：4歳ぐらいまでです4歳半か

小学校も近くなってきて、父の養父母の姉がね、ご両親がね、まだ健在で。

ちょっとこのまま子ども三人が成人するまでね、こんなど田舎にいてもね、しょうがないから、あのせめてましな高鷲町いうんですけど。私の母の実家の方へ行ってくれんかいうて出された。そのへんのこともかろうじて覚えているそれからね、ちょうどその疎開先のいまところで、さっき庭はさんで母屋と牛小屋があつて有ります言うたでしょ。

その庭にね、いわゆるあの天皇陛下の終戦宣言ね、その時のことも状況覚えています。村の人がみな集まってきて、くわーっていうてね聞いていました。

あと、進駐軍がジープに乗ってきましてね、近くの竹藪につっこんでね、事故起こした。そういう現場も見に行つたし、まだ4歳半ですから、もうすでに記憶に残ってる。

私の姉は2つ上ですから、親父の顔も覚えてますし。ほんでとにかくお父ちゃん、お父ちゃんゆうてね言うてましたけど。

ほんでね、あと私の記憶の戦後の話なんですけど。とにかく母は私らに対して子供に対してね、お父さんはとにかく戦死やゆうて聞いてると。戦死やゆうことになってるし。お父さんいないけど、そういうこと気にしないで、まあまだ戦死通知はもうてるけども、これこれこういう状況やという、もう遺骨も何にもないし、ただ知らされただけでほんとに信用性もわからん、生きてるものとして、とにかくそんなことをね、劣等感持たないで勉強せえと言われた。それですーときた。

中学生になってから、戦時中の話を機会、チャンス捉えて私らに理解できるように話してくれるだけでね、こちらから聞いても忙しくてね、まあ先生の仕事もしてますし、話す機会もなかったんですけどね。

ただね、中学校にあがったころですね、あのいわゆる七輪でご飯炊いたり何かしてたんですけどね、あの親父のね、スクラップ新聞かそれが出てきてね、ちゃんと持ち帰ってたんですけど、こんなん残してもしゃあないな、思い出だけやし。何も進展ないし、まあそんなんで焚きつけに燃やしてもうて。まあそういうことも実体験で見て覚えてますし。

小林先生：あの一つだけ最後にね確認したい。お父さんのお父さん、おじいさんですね。第一次世界大戦で、どこで青島ですか、それが分からない。

平野さん：青島かなあ、あっちの方かもしれませぬね。よくわからない。

それと一つ親父はね陸軍です。

で、実家の、実家っていうか、自分の亡くなった両親のね家があつたのは多度いうところですね。桑名のちょっと上あたりですけど。

そこの配属は普通は三重県の明野ちゅう、今確かなんかあつたと思うんですけど、自衛隊もある。まだのこつとる。明野練兵、連隊かな。

そこだと私思ってたんですけど。いやちゃうで、おふくろがね。鯖江連隊だと。

小林先生：鯖江。お父さんのお父さんは？いやお父さん。

平野さん：私の親父。お父さんのお父さん、私のおじいさんにあたる人は詳しいことは知らないんですわ。

小林先生：お父さんは鯖江に行かれた？

平野さん：そうです。てっきりね三重県実家やからね、明野やった思ってたんですわ。鯖江だゆうて。そんでね出征の前、まあ家に帰ってきて、遺書残したり遺髪残したりしてる時ですね、その時におふくろが親父にきいた話によると、鯖江連隊はほんとにきついところで、トイレで自殺をする人がよくいたという話をね、私の親父から聞いてると、それを聞きましたね。

ほんでね、もう最後ですけど、とにかく戦争に行った。ほんで終戦のそういう戦死通告が文書でだされて、フィリピンのルソン島のバレテ峠で迫撃砲が体、胸にあたって即死状態で死んだ。そういうとこまでは、聞いた話でお袋も信用しがたい。いったい誰から聞いたというものがね、記録がないんですよ。

福井の鯖江連隊が果たしていったいどの戦地に送られたのか、という記録。もしそれがあれば私もそれに乗じて、戦後遺骨団とか募集してますけどね、確かなそういったあれがあれば行くんですけど、行く気がおこらない。

聞いたところによると、山崎の遺族の会長さんね。

私も行ったよ、と。遺骨収集に。だけどな親父がどこそこで死んだ聞いてるけれど、そこを希望として出してるんやけど、行かされたのはロシアのソ連。ロシア。だから無茶苦茶なことやってるでっていうのは聞いた。

だからねあのそこらへんの疑問が今更あるし。戦争に対しては親子三代、親子三代にわたってね、えらい被害にあってるし。戦争が憎い、戦争になったらあかん、勝ち負けあらへんし。まあそれも私の持論もあるし、親からも聞いている。戦争というのか、親子喧嘩、兄弟げんか、親戚との仲たがいね。いろんなことから起こるんだ。そういうことがないように、とにかくその知識を身につけ、いろんなね、法律にしる経済にしる、なんでも政治もね。

とにかく勉強せえって、だからとにかく要領よく生きなさいという感じなんですよ。要領よく。

それで今ほいっと思い出したのが、もう一つ聞いた話戦時中ね。

いわゆる総動員令がかかったころの話。近所で赤紙が来た。

ほしたらね、醤油をがぶがぶ飲んで、ほんで体調をおかしくして検査の前に。

ほんで免れた人がいっぱいいて。

というようなこともお袋いうてましたね。実際の話やと思うんですよ。それも知識やね、うん。

小林先生：分かりました。ありがとうございます。